

『看護技術—— ナラティヴが教えてくれたこと』 学生が看護技術の深い意味を 考えるきっかけに

著：吉田みづ子／定価：本体 1,600 円 + 税
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



本書の意図は、帯の言葉「看護技術の定義は、ベッドサイドで更新される」に示されている。そこからページをめくると、「臨床経験をもっと語ろう。心の風景も交えて語ろうよ。語りの連鎖が看護実践の知となって拡がるのだから……」と囁く著者の声が聴こえてくる。看護師として未熟だった頃の著者、患者の姿とそこでの失敗やさまざまな出来事が重なって鮮明に浮かぶ。その語り口が絶妙で、読み手の心にス〜ッと入ってくる。まさに、なまのナラティヴ・アプローチである。

本書の特徴は、章立てがなく物語読本にこだわっているところにある。取り上げた看護技術は、排泄助、整容、環境整備など17項目で、ごく一般的に分類されている。それだけをみれば、施設ケアの福祉職のためのテキストかと安易に受け止められてしまうかもしれない。しかし私は、看護学生はもちろん、多くの看護師に読んでもらいたい一冊として推奨したい。

■語られる風景、そこに見えるもの

17項目の看護技術は4つの柱に沿って語られる。まずは技術の一般的な定義が示され、2つ目の柱、「看護技術のある風景」で、その技術にまつわる経験が臨場感豊かに語られる。

そして3つ目の柱、「看護技術の傍らに見えたもの」では、その生きた経験をもとに、紹介技術が臨床でどのような意味をもつか、考察される。

その考察をうけ、冒頭の技術の定義が、より広がりをもったものとして更新される。これが4本目の柱である。

■身近な技術に潜む“看護のエキス”

読み進めていくと、若かりし頃のあの純粋さが蘇ってくる。懐かしく、これまでの看護技術のテキストとは一味違うことに気づく。溢れる看護のエキスにホッとする。また、自ら先輩から盗み取った技を提示し、先輩から技を盗み取れと、さり気なく伝えるなど、ユーモアを交えながらのその語りには思わず頷かされる。私も、急変時の対応などは、先輩の背を見、真似ながらトレーニングを積んで一人前になってきたからである。

本書は、とにかく読みやすい。サラリと構成されたその枠は、当たり前のようにいて当たり前ではなく、実に小気味いい。また、語っていることが身近なことであるがゆえに読み手を惹き込み、感性を揺さぶる。そこに潜んでいる看護のエキスが見え隠れする。看護学生たちも、先輩の生きた経験に基づいた考察から学ぶことは多いだろう。

著者は、本書で大切な問いを投げかける。「私たちは患者の姿を忘れ、“道具の点検”だけをしていないでしょうか」。

私は看護職の同志として、著者に対し敬意を表す。「まず読んでご覧!」といえるテキストに久々に出会った、そんな気分になっている。